『五輪峠』「下書稿(二)手入れ/春と修羅第二集　　一九二四・三・二四

(二)

宇部何だって？……
宇部興左エ門？……
ずゐぶん古い名前だな
　　何べんも何べんも降った雪を
　　いつ誰が踏み固めたでもなしに
　　みちはほそぼそ林をめぐる
地主ったって
君の部落のうちだけだろう
野原の方ももってるのか
　　……それは部落のうちだけです……
それでは山林でもあるんだな
　　……十町歩もあるさうです……
それで毎日糸織を着て
ゐろりのへりできせるを叩いて
政治家きどりでゐるんだな
それは間もなく没落さ
いまだってもうマイナスだらう
　　向ふは松と岩との高み
　　その左にはがらんと暗いみぞれのそらがひらいてゐる
そこが二番の峠かな
まだ三つなどあるのかな
　　がらんと暗いみぞれのそらの右側に
　　松が幾本生えてゐる
　　藪が陰気にこもってゐる
　　なかにしょんぼり立つものは
　　まさしく古い五輪の塔だ
　　苔に蒸された花崗岩(みかげ)の古い五輪の塔だ
あゝこゝは
五輪の塔があるために
五輪峠といふんだな
ぼくはまた
峠がみんなで五っつあって
地輪峠水輪峠空輪峠といふのだろうと

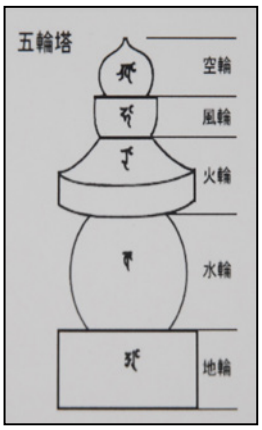
たったいままで思ってゐた
地図ももたずに来たからな
　　そこでいま五つの峰が
　　どこかの遠い雪ぞらに
　　さめざめ青くひかってゐる
　　消えやうとしてまたひかる
このわけ方はいゝんだな
物質全部を電子に帰し
電子を真空異相といへば
いまとすこしもかはらない
　　宇部五右衛門が目をつむる
　　宇部五右衛門の意識はない
　　宇部五右衛門の霊もない
　　けれどももしも真空の
　　こっちの側かどこかの側で
　　いままで宇部五右衛門が
　　これはおれだと思ってゐた
　　さういふやうな現象が
　　ぽかっと万一起こるとする
　　そこにはやっぱり類似のやつが
　　これがおれだとおもってゐる
　　それがたくさんあるとすると
　　互ひにおれはおれだといふ
　　互いひにあれは雲だといふ
　　互いひにこれは土だといふ
　　さういふことはなくはない
　　そこには別の五輪の塔だ
あ何だあいつは
　　いま前に展く暗いものは
　　まさしく北上の平野である
　　薄墨いろの雲につらなり
　　酵母の雲に朧ろにされて
　　海と湛える藍と銀との平野である
向こうふの雲まで野原のやうだ
あすこらへんが水沢か
君のところはどの辺だろう
そこらの丘のかげにあたってゐるのかな
そこにさっきの宇部五右衛門が

やはりきせるを叩いてゐる
雪がもうここにもどしどし降ってくる
塵のやうに灰のやうに降ってくる
つつじやこならの灌木も
まっくろな温石いしも
みんないっしょにまだらになる

「五輪峠」　「文語詩五十編」

上記二編下書き稿を、晩年文語詩に改作した。

五輪峠と名づけしは、	地輪水輪また火風、
（巌のむらと雪の松）	峠五つの故ならず
ひかりうずまく黒の雲、	ほそぼそとめぐる風のみち、
苔蒸す塔のかなたにて、	大野青々みぞれしぬ。



「五輪峠」詩群④

『丘陵地を過ぎる』春と修羅第二集　　一九二四・三・二四

きみのところはこの前山のつづきだらう
やっぱりこんなごつごつ黝い岩なんだらう
松や何かの生え方なぞもこの式で
仕事の方が済んでから
木を植える場所や何かも決めるから
ドイツ唐檜にバンクス松にやまならし

やまならしにもすてきにひかるやつがある
白樺は林のへリと憩(やす)みの草地に植ゑる
あとは杏の蒼白い花を咲かせたり
きれいにこさえとかないと
お嫁さんにも済まないからな
雪が降り出したもんだから
きみはストウブのやうに赤くなってるねえ
　　水がごろごろ鳴ってゐる
さあ犬が吠え出したぞ
さあ云っちゃ失敬だが
まづ犬の中のカルゾーだな
喇叭のやうないゝ声だ
　　ひばがきのなかの
　　あっちのうちからもこっちのうちからも
　　こどもらが叫びだしたのは
　　けしかけてゐるつもりだらうか
　　それともおれたちを気の毒がって
　　とめやうとしてゐるのだろうか
ははあきみは日本犬ですね
　　生藁のうえにねそべってゐる
　　顔には茶いろな縞もある
どうしてぼくはこの犬を
こんなにばかにするのだろう
やっぱりしゃうが合はないのだな
　　どうだ雲が地平線にすれすれで
そこに一すじ白金環さへつくってゐる

【雑感】

五輪峠は宮沢賢治、河東碧梧桐、柳田國男、佐々木喜善、澤邊琢磨が越えた峠である。また、源義経の北帰行のルートでもあったとのこと。五輪峠を越え、遠野・大槌を経て、普代村へ行く道が北帰行コース。そして、大陸へ？

私が若い頃２年程住んだ住宅は普代村字**力持**という住所でした。義経が蝦夷地に向かう際、海上安全・武運長久を祈願した神社が**鵜鳥神社**と言い、**力持**から神社まで行く地区を「**不行道**」と言います。**弁慶**が**力持**で、頼朝勢から義経を守っていたとも言える。意味ありげな地名ではありませんか。

早春の旧五輪街道・上大内沢

2021・3・16

大内沢川(おっつぁがわ)沿いに五輪峠へ

地蔵堂と上大内沢の石碑群

千葉上野屋敷跡（この家の高台にある）通称上野屋敷
父上野の菩提を弔うために千葉日向が五輪塔を建立。

伊[illegible]おどや(うどん屋)、さがや(酒屋)まである。藩境を越えていく人や、遠野から馬を買ってくる人も多く、当時賑わっていたようです。

馬洗淵(まれぶち)
番所のすぐ下にあり、馬を洗った川

奥羽山脈の「供養塚」